

# 医学教育ニュース (第 39 号)

## 特集: 医師国家試験結果を踏まえた教育の改革案

平成25年7月5日 発行

編集 久留米大学医学部教務委員会 広報活動委員会

### 特集

#### 教務委員長就任にあたって

教務委員長 神田芳郎 (法医学・人類遺伝学講座 教授)

本年4月より桑野剛一先生の後を受け、医学科教務委員長を拝命致しました。久留米大学の昨年度の新卒者の医師国家試験合格率は85.9%と、最近の10年間の中では最低という、大変な状況での船出となりました。

大学教育は成人に対する教育で、学生がニーズに沿って主体的に学習すべきであり、そのような方向に導いてゆくのが大学教員の役割であると思います。また国際基準に基づく医学教育認証評価制度でも、授業時間の短縮や、学生の教育計画への参画などが重要視されております。久留米大学も長期的にはこのような方向で、カリキュラムや教育計画を策定してゆくべきだと思います。しかしながら、まず医師国家試験に合格しないとスタートラインに立てないのも事実です。国家試験の合格率を上げることが喫緊の問題だと感じています。具体的な方策については今後継続的に検討していくつもりですが、総合試験や通年成績と国家試験の合格率は一致していることを考えると、当学の基本的な教育の方向性そのものは間違っていないものと思いますし、多くの学生は前にも述べたような主体的な学習が行えているものと考えられます。対策を講じなければならない対象は、成績下位の学生たちであり、彼らの学力をいかに底上げするかが、国家試験の合格率を上げる短期的には最も有効な方策だと思います。

一方で長期的な視点に立てば、主体的学習をより一層促進し、学生全体のレベルアップをするための教育方針の大きな見直しも必要だと思います。久留米大学医学部は、「高水準の医学とヒューマニズムを併せそなえた医人の養成をめざし、卒前教育では、その方向づけと基礎づくりを行う。」ことを教育目

標に掲げており、このような目標を達成するためにも生涯にわたり主体的学習を続けられる医師の育成は必要不可欠です。先ほども述べましたように本学でコアカリキュラムが導入されて10年以上が経過しています。PBL テュートリアル、基礎医学特論、アドバンスドコース等も同時期に導入されました。PBL テュートリアルについては3年前の医学教育ワークショップで、大胆な変革が提言されておりますし、基礎医学特論、アドバンスドコースについてもコアカリキュラムとの違いがはっきりしないとの意見もいただいております。さらに今後は国際基準に基づく医学教育認証評価制度についても対応が必要になってくるものと思います。以上のような状況を踏まえカリキュラムの見直しが必要な時期に来ていると痛感しており、本年度より内村医学部長及び山木学生委員長のご指示のもとカリキュラム委員会を立ち上げました。今後はこの委員会でPBL テュートリアル、基礎医学特論、アドバンスドコース、医学英語等を中心とした短期及び中期のカリキュラムの改変を検討し、医学教育がご専門である神代教務副委員長には、引き続き、教務委員会内に設置されたカリキュラム検討委員会で国際基準に基づく医学教育認証評価制度に対応できる長期的なカリキュラムの改変を検討して頂く予定です。

何分力不足で、どれだけ役に立てるかわかりませんが、教務委員会の皆様の意見を頂きながら全力を尽くす所存です。久留米大学医学部医学科の教育改革が良い方向に向かうよう、先生方のご協力を切にお願い致します。



## 贈る言葉

### 一人で当直する夜のために

久留米大学医学部のコンサルタント会（名称変更前は保証人会）でこの20年間、多くの6年生とお付き合いしてきました。幸いに全ての6年生は卒業試験と国家試験に合格して（皆さんが1回で合格）くれました。1年生のときからのお付き合いですので、コンサルタント会のほかには、授業の時や廊下での立ち話位ですが、段々と医師にむけて心構えができていくのが、よくわかります。研修制度が確立した近年では進路相談にこられる学生はすくなくりましたが、以前は進路相談に来られる6年生もありました。また、すこし心配な6年生がコンサルタント会のなかにいるときは、6年生だけで新年会を開いたときもありました。

そのような機会に、「一人で当直する夜のために」今の勉強をしてくださいと、必ず話すようにしています。卒業試験や国家試験にハードルを設定すると、どうしてもその場しのぎの対応になり、傾向と対策に偏りがちになります。卒業試験や国家試験にハードルを設定するもっともおおきな欠点は、それが達成されると、気が抜けてしまうことです。恒常性が維持できなくなり、次のステップに集中できず、所謂5月病になったりもします。医師にとって恒常性の維持は不可欠です。そのために試験に合格するため

### 贈る言葉

私が久留米大学に入学したのは、昭和43年、1968年のことである。45年も前のことである。過去を振り返ってみると、随分昔のことであり光陰矢のごとしとはよく言ったものだと感慨深いものがこみ上げてくる。学生諸君は6年間、沢山のことを経験し、学んできたことと思う。私は、学生時代には講義はまじめに出席し進級試験も再試験を受けたことがなかったが、勉強ばかりに明け暮れる生徒ではなかった。学生時代には、柔道部に在籍し文武両道を大事にした。大学生になってから本格的に柔道を始めたので、皆に追いつくために体力をつけ、技を磨いた。2年間で背負い投げを習得し、この大技を得意とした。大きい相手を背中から畳にねじ伏せ、立ち技で一本を取る柔道にこだわり、技を磨いた。小さい相手には内股や、大外刈りで一本を取った。自慢ではないが、6年間の戦績は、ほとんどが一本勝ちで負けたのは2~3回位しか記憶にない。一本を取る柔道であったので寝技はさほど必要ではな

### 伊東恭悟（免疫・免疫治療学講座 教授）

の勉強ではなく、一人で当直する夜のために勉強してくださいと必ず話します。

いつの日か、必ず、一人当直をしている夜中に、「救急車が向かっています」と事務当直から電話連絡が入る状況に直面するはず。その時に、正しい診断と治療ができないまでも、誤った診断や治療をしないことが大切です。誤った診断や治療は、患者さんの生命にかかわる事態となります。手元には、当直実践マニュアルとかの冊子があるはずですが、経験したことのない病態の患者さんに、一人で、先輩医師の指示や支援もなく、診療にあたる緊急事態では、参考程度にしか役立ちません。

今、君が勉強している知識が、血肉になるはずですので、一人で当直する夜のために、医学知識を身につけてくださいと必ず話をするようにしています。

もちろん、一人で当直する夜を無事こなすためには医学知識だけでは不十分です。的確な状況判断や事務系・医療スタッフとの日常の信頼関係も大切です。そして何よりも、あなたを支えているご家族や社会への感謝と医師という職業への矜持が大切ですと話しております。

### 白水和雄（外科学講座 教授）

かった。6年間で九山大会は6連覇、西日本体育大会は決勝で惜しくも敗れ3連覇は逸したものの、2連覇を成し遂げた。全日本体育大会は3度優勝した。このように、6年間の柔道を通して相手に勝つためには体力をつけること、技を磨くことの大切さを学んだが、キャプテンを任されてからは、それ以上に心を磨くことを学んだ。自分よりも弱い立場の人のことを考え、痛みを理解し分かち合い、苦難に耐え忍ぶこと等多くの精神的な側面が鍛えられたと思っている。

最近、全日本柔道連盟の不祥事が相次いでニュースになっているが、人間形成の場である柔の道に恥ずべき行動であろう。日本の柔道が世界に勝てない理由の一つかもしれない。野球の世界では、すばらしい良い選手と言えば、走・攻・守の三拍子揃ったイチローが代表的な選手である。大相撲の世界では、心・技・体の三拍子である。横綱朝青龍は技・体はすばらしかったが、心に欠けていた。いくら強くて



## お知らせ

平成25年度夏休みを利用した地域医療  
サマースクール〔一泊二日〕 開催  
第四学年、五学年の皆さんへ  
久留米大学教育関連病院で地域医療の現場を体験して  
みませんか？

申し込みは各教育関連病院へ

研修医の久留米大学医学部大学院入学について  
研修医の大学院入学が可能になりました。さらに授業料が減額されますので、  
入学希望者は是非大学院に進学して下さい。

問合せ：医学部教務課 内線：3021

### 訂正ならびにお詫び

医学教育ニュース第34号「第1回秋の病理学校2011を主催して」に関して-----病理学講座 新野大介先生が中心になって主催したように誤解を招く表題を付けてしまったことを深く謝罪いたします。「第1回秋の病理学校2011」とtitleを改訂いたします。このtitleは、中心となられた代表主催者を新野先生も援助されたので、この方が病理学の宣伝になるだろうと思って編集責任者の井上雅広が提案させていただいたものであります。

### ◆編集後記◆

今春の国家試験合格率が残念な結果となりました。学生さんは来年の国試の合格率をあげることを目標に全員で奮起してください。教務委員会も結果を真摯に受け止め、神田教授を中心として、教育カリキュラムの改革および成績不振者の対策を一丸となって取り組む所存であります。今回も執筆の先生方から、学生さんのためになるような数多くの助言を頂いていますので、内容は濃いものとなっております。

医学教育ニュースは久留米大学医学部医学科のホームページにてご覧いただけます  
(<http://med.kurume-u.ac.jp/zaigaku12.html>)。皆様方のさまざまなご意見等を広報活動委員会まで頂ければ、幸いです。

編集責任者： 井上雅広 inouedna@med.kurume-u.ac.jp (感染医学講座、真核微生物学部門)